

ドウニ・サス＝ンゲソ大統領 ②

ブラザヴィルの中心はコンゴ川に面している。2016年2月、川に沿ってきれいな「Corniche」と呼ばれる舗装道路が開通した。歩道も広く、ジョギングや散歩する人たちの人気のスポットで、夜には対岸のコンゴ民主共和国(RDC)の首都キンシャサの夜景はきれいに見える。昨今、さらに川に沿って道が下流へ延びており、街の中心を通ることなくバコンゴ(Bacongo)やマケレケレ(Makélékélé)といったブラザヴィルの南部の地区に直結するようになった。

街の中心部から少し北の河岸に「ビーチ」と呼ばれる船着き場がある。コンゴの北方や中央アフリカなどへの物資輸送の重要な拠点となっている。また、対岸のキンシャサへの連絡船の発着場でもあり、このビーチは国境の機能も担っている。1999年4月その場所で、「ビーチ事件」(Affaire des disparus du Beach)と呼ばれる出来事が起きた。

話は前回に取り上げた1997年の政権を巡る内戦に遡る。10月25日、武力衝突の末、ドウニ・サス＝ンゲソはパスカル・リスバ政権を倒し、大統領に返り咲いたと宣言した。一連の戦闘では多くの犠牲者が出た。一説には90年代の内戦で、数十万人が亡くなったとされているが、本当の数字は分からない。軍事クーデターで勝利したサス＝ンゲソは「移行のための国民評議会」(Conseil national de transition)を設置し、次なる体制を整えていった。その一方で、政権争いに敗れて敗走した兵士たち、とくにコレラ氏の私兵であった「ニンジャ」の残党は南の森に潜み、次なる襲撃の機会をうかがっていた。1998年の暮れ、その機会が訪れることになる。

マケレケレやバコンゴ地区で、突然コレラ派の残党であるニンジャが現れたとのニュースが飛び交った。ニンジャたちはそこを通り抜け街の中心を目指していたようだ。政府側はすぐに軍隊を派遣。この二つの地区で武装闘争が始まろうとしていた。もし、コンゴ川に沿って今日のような道ができていれば、戦闘の舞台は街の中心だったかもしれない。一般市民にとって、こうした状況ではどちら側の兵士からも殺されたりする危険がある。武力衝突から逃げるべく、周辺住民は何も持てないまま森への避難を余儀なくされた。

戦闘は圧倒的な武力の差で政府軍が勝利した。そしてニンジャたちは再び森へ敗走して行った。ちなみに、この残党は2000年代になってもしばしばこの地域一帯の治安問題となっていた。その首領は「ントウミ」(Ntoumi)と呼ばれ、紫色を基調とした布をシンボルとして何か一種の宗教性を帯びた武装集団となっていき、鉄道や近隣の村々で略奪を繰り返していった。

森へ避難した人たちの状況は厳しいものだった。実際に避難生活から帰ってきた人から話を聞いたが、その内容はかなり過酷なものだった。食べるものがないなか口のできるものは何でも食べたという。劣悪な衛生状況でマラリアなどで命を落とした人も少なくなかった。兵士に見つかってしまうと敵味方関係なく、命の危険にさらされたという。目の前で肉親が殺されたり、面白半分は無益な殺戮が横行したようである。女性への性的暴力も横行し、なかには兄弟姉妹間での性行為を強要するような卑劣な行為もあったと言われている。

避難者のなかには、隣国に逃れた者もいた。コンゴ川は街の中心部では2国間の国境ともなっているが、南へ行くとRDC

のなかを流れるようになる。つまり、南の方では陸続きの国境があり、陸路で国境を越えることができる。また、場所によっては乾季には徒歩で川を渡れる浅瀬になっているところがあるようだ。南に避難した者のなかには、こうしたルートを辿って、隣国に避難した者も少なくなかった。

和平合意を終え国内の情勢が落ち着き始めた頃、政府はRDCと協議をして、避難民を人道的に帰国させることにした。コンゴからそのために係員を派遣し、避難した人たちに呼びかけ帰国を促した。多くはバコンゴ、マケレケレ地区からの避難民で、ベルナル・コレラを支持していたこともあり、北側を中心とした政府からの報復を恐れていた。こうした状況下ではおそらくさまざまな噂が飛び交っていたことだろう。「帰国しても身に危険が及ぶことはない」と安全を保証し、帰国を促していった。

1999年5月、国によってチャーターされた船に乗って、約1,500人が最初に帰国した。ところが、ビーチに到着したらすぐに政府関係者と軍隊に誘導され、性別や年齢で分けられた。とくに若い男性は大統領府関係者によって尋問され、プール県出身者はニンジャであると疑われた。彼らはトラックに乗せられ大統領関係施設に送られた。そして、その後彼らの消息は途絶えたのである。こうしてキンシャサから帰国を促された人たちのなかから、353人が行方不明になった。コンテナに詰められてコンゴ川に捨てられたという説もあれば、集団で焼かれたという説もあるが、いずれも確かな証拠はない。しかし、行方が分からなくなったことは事実で、この件については2005年に裁判が開かれている。そして85人の行方不明に対して責任が問われた16人の官僚や軍人が有罪判決を受けた。しかし、当時の政治混乱のなかのことであり、理由から刑は執行されていない。また、85人の行方不明者の家族には15,000ユーロの賠償金が支払われることになった。

この件はフランスでも訴訟となり、拷問や強制隔離など人権に関わる重大な罪として取り上げられるようになった。2002年は、外国で犯した罪でもフランスに在住する関係者には刑罰の対象となることが認められた。こうしてこの事件はコンゴ国内だけでなく、フランスや人権問題に関わることとしてオランダのハーグでも取り上げられている。

1999年末に敵対勢力との和平合意を成立し、2001年3月には「排除なき国民対話」(Le dialogue national sans exclusive)が開催された。ただ、この対話には、人道的罪を負ったリスバ前大統領やコレラ前首相の参加は認められなかったこともあり、多くの党がボイコットした。翌年の2002年には新たな憲法が制定され、首相を廃止し、大統領の権限が強化された。大統領1期7年で2期までとして、年齢制限として70歳までとなった。こうして、民主選挙によってサス＝ンゲソ大統領が誕生し、2009年まで政権を担った。2009年の選挙では78.61%で再選。2期目の任期が切れる1年前には憲法改正を国民投票に諮り、1期7年だったのを5年とした上で、2期までという規定と年齢制限を撤廃してさらなる再選の環境を整えた。新憲法は2015年11月6日から施行され、2016年には3選を果たし、2021年8月からは4度目の任期に突入している。サス＝ンゲソ大統領は現在78歳。単一政党時代を含めると30年以上政権を担っている。